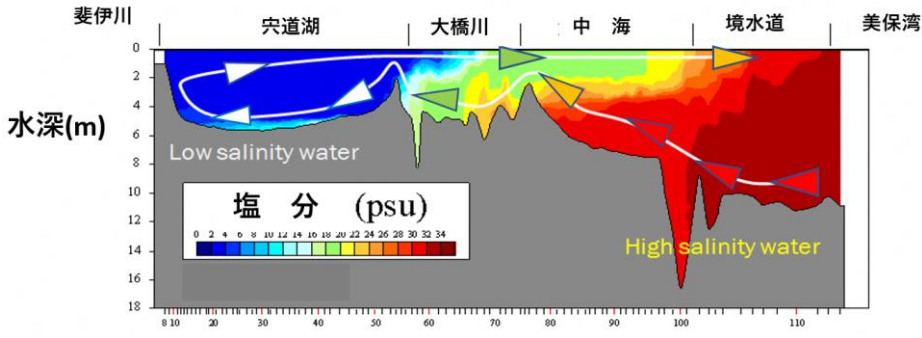


地質サイトカード

カードNo.	B	通しNo.	47	作成日	2025/6/17
ヘリテイジ名	しんじこなかうみ 宍道湖中海低地帯				
地質・地形	宍道湖中海低地帯は、島根半島の南にできた東西約60kmに亘る低地形のジオヘリテイジである。山陰を代表する出雲平野や宍道湖・中海とその湖岸域によって構成されている。沖積平野に残る古代からの人々の歴史と近年の地球温暖化による環境問題へ深く関わったユニークなジオヘリテイジでもある。 宍道湖と中海は島根半島の南の窪地にできた日本を代表する潟湖として知られている。現在の形状は、約2万年前の最終氷期以降の海面の上昇と斐伊川からの土砂の搬出の歴史過程が大きく関係している。約12000年前には、和久羅山南の高まりで隔てられた東西別々の低地帯を流れる河川水系が形成されていた。そのような別々の水系が約7000年前の縄文海進後に1つの水系になったと考えられている。その後、中海側では、弓ヶ浜半島が中国山地や崩壊が進む大山からの土砂で砂州の足がかりを造り、日野川流域の鉄穴流しによる排出土砂が砂州を拡大していった。西側では、神戸川を通して流出した三瓶火山の火砕流堆積物や斐伊川の流出土砂で沿岸水域が埋め立てられ出雲平野が拡大し、さらに斐伊川からの鉄穴流しによる土砂で平野の東部を急速に拡大していった。出雲平野を西流していた斐伊川の東流によって宍道湖の環境変化が明確になった鎌倉時代以降、斐伊川水系としての現在の形になったと考えられている。 宍道湖と中海は、別々の湖とみなされがちであるが、大橋川によってつながった世界でも希な連結汽水湖である。境水道を通じて美保湾（日本海）から入ってきた海水は、湖水との塩分による比重差によって二重構造を形成しながら、下層水として中海の湖底から宍道湖へと流れ込む。宍道湖では、上流の斐伊川等から流れ込む淡水と東西性の風によって湖水は攪拌され、やがて塩分の低下した宍道湖水は、上層水として中海、美保湾へと流出する。中海の塩分は海水の約1/2、宍道湖は海水の1/10程度である。このような海水と淡水が交わる汽水域では、水域ごとに異なった動植物が生息するなど、極めて多様性に富んだ生態系が形成されている。ラムサール条約の登録地としても知られている。 				
歴史・文化	たたら製鉄は、中国山地で古くから行われており、この地域は原料となる良質な砂鉄を含む花崗岩が広く分布し、加えて、燃料となる木炭を生産した森林も広大であったため、鉄の一大産地で、最盛期の江戸後期から明治初頭には国内の鉄生産量の9割近くを占めた たたら製鉄の原料となる砂鉄は、山を切り崩して砂鉄混じりの土砂を水路へ流し込み、砂鉄を精選する砂鉄選鉱場で砂鉄と土砂の比重の違いを利用して砂鉄を集める鉄穴（かんな）流しと呼ばれる手法で採取された。 砂鉄の含有率があまり高くないため、約2億㎡におよぶ大量の不純物としての土砂が排出され、最終的には土砂の多くは、斐伊川を通じて下流に運ばれ、斐伊川中流の氾濫原あるいは宍道湖岸の出雲平野に堆積した。近世に堤防や護岸によって河道が固定化されるようになると、河道内にも大量の土砂が埋積し、周辺の氾濫原より河道が高くなり斐伊川の天井川化が進んでいった。 また、沖積平野である出雲平野には屋敷林に囲まれた大規模な散居集落が点在しており、屋敷林の樹種はクロマツで、10mを超えるマツはきれいに刈り込まれている。築地松と呼ばれるこの屋敷林は家屋の北・西側にあり、冬季に吹き付ける強い北西の季節風をさえぎるためといわれている。 築地松は約300年前から始まったと考えられており、農民が時々起こる川の氾濫から小屋を守るために周囲に土塁（築地）を設置し、土塁を保護するために初期はタケ類を植え、徐々に土地が乾燥してくるとタブノキなどの常緑広葉樹を植えるようになった。堤防が強化され洪水が少なくなりさらに乾燥が進むと、北西の季節風を防ぐために乾燥地を好むクロマツが植えられるようになった。 築地松の独特の樹木景観は、単なる防風林に留まらず、芸術の域に達しており、全国に誇り得るかけがいのない文化遺産である。				

生物・生態

この低地帯には、わが国で5番目に大きな湖である中海と7番目の宍道湖の、わが国を代表する2つの大きな湖がある。

人の影響があまり及んでいなかった時代の宍道湖や中海一帯の水辺には、ヨシ群落やツルヨシ群落などの湿地草本群落、水中にはアマモ群落などの海生植物群落が生育していたと考えられ、現在では一部の自然湖岸に残っているヨシ群落等を除けばほとんどみられなくなっている。

宍道湖と中海では塩分濃度が異なり、宍道湖は海水の約1/10、中海は約1/2の塩からさの水域となっている。貝類など定着性の強い生物は、この塩分濃度の違いにより生息する生物が大きく異なっている。例えば、宍道湖にはヤマトシジミが多く生息しているが、中海には生息しない。一方、中海に生息する赤貝と地元で呼ばれているサルボウやアサリは宍道湖には生息していない。

一方、魚類や鳥類など移動性に富んだ生物たちは、少し様相が異なっている。まず、魚たちからみてみよう。宍道湖と中海は、斐伊川水系の最下流域にあたり、海の魚から川の魚まで多彩な顔ぶれの魚たちが生息している。水ぬるむ春には、中海に日本海からたくさんの魚が入ってくる。そして宍道湖まで遡上する魚も多い。これら遡上した魚の多くは、冬前には再び日本海に戻る。日本海から遡上してくる魚の大半は稚魚や幼魚などの小型の魚たちで、中海や宍道湖で大きく生長する。

宍道湖・中海には、このように暖かい時期に海からやってくる魚と、そもそも汽水をすみかとする魚、さらに川と行き来する魚と大きく3つの生活型の異なる魚たちがみられる。宍道湖・中海で確認されている魚は、約190種であり、この中からほとんど淡水域で暮らす淡水魚と、ほとんど海域で暮らしまれに進入してくる海産魚を除くと、約130種になる。

中海・宍道湖は、野鳥の宝庫としても知られており、平成17年に、湿地の保全と賢明な利用を進めることを目的とした条約であるラムサール条約登録湿地となった。この条約ではさまざまな基準が設けられているが、宍道湖・中海は、①水鳥が2万羽以上利用する、②水鳥の一種の個体数の1%以上が利用する、③固有な魚類の種の相当な割合を支えている、④魚類(貝類を含む)の生育場所として重要な湿地、漁業資源の重要な回遊回路などの基準をクリアしている。